

徳永直の会会報

第66号

政治と文学

会長 高木陽助

本格的な梅雨の季節。例年になく雨量が多く、災害も多発している。しかし梅雨より不安なのが国内の政治状況である。政権与党は三人の憲法学者が、衆院憲法審査会で「違憲」と断じた安全保障関連法案を、九月下旬まで国会の会期を延長し、成立に万全を期すという。この国の「国のかたち」はどうなるのだろうか。

徳永直は「政治と文学について」次のように述べている。

文学というものは、いわゆる「文学心」だけでも生まれるけれど、はたらく人のばあいそれだけではつよくなれない。また「作家になりたい」という希望や、野心だけでは、作家たるほどの原動力となることは出来ない。才能というものも、漫然とそれだけでできり離してあるものではない。この時期に、つまり階級的に自覚したことで、はじめて私にとって私の文学が生れることができたのである。それは私が作家になろうとなるまいと、それにはかかわりなく、文学というものが、全一的に、趣味とか娯楽とか、立身とか出世とかを超えて、私にびったり抱

目次

- ・ 政治と文学 高木陽助：p 1
- ・ 徳永直宛書簡 和田崇：p 2
- ・ 大切な人を失った 中村青史：p 6
- ・ 二〇一五年度総会報告：p 7
- ・ 第三十八回「孟宗忌」写真・その他：p 8
- ・ 第一回「徳永直の作品紹介文」募集要項：p 10

くことができるようになったのである。ブルジョアとか軍ばつとかいうのが私たちをさく取して、その支配下に一切の文化もつくられている。それとたたかわなければ私たちの生活はよくなる。それが出来ない。文化・文学のこともその一つであって、文学だけが政治や経済と別個にあるのではない。ということがだんだんわかりはじめたのである。

昭和二十三年八月に真光社から発行された『働く者の文学読本』の中の抜粋である。勿論、当時と現代とは時代状況が異なる。しかし、徳永直は「階級的に自覚したこと」で「私にとって私の文学が生れることができたのである」と述べる。さらに「文学というものは、その人の生活や環境を無視して生れることが出来ない」という。私たちは今一度、自分の生活や、自分や友人知人の、共同体の、日本の置かれた環境を深く見つめたいものである。

徳永直宛書簡

浅井花子 筆
和田 崇 注

はじめに

本稿は、作家の浅井花子が一九五三（昭和28）年七月一四日に徳永直へ宛てた書簡の翻刻である。浅井は熊本県出身で、「ある夫婦」〔『文学評論』一九三五年五月号〕及び「泥濘の春」〔『婦人文芸』一九三五年六月号〕が第一回芥川賞の候補作品となるなど、作家同盟解体後のプロレタリア文学派の有力な新人として注目された。また、戦時中に小樽へ渡り同地で終戦を迎え、戦後は婦人有権者同盟を組織して市議選に立候補するなど、婦人運動家としても活動した。この度、生前の浅井と交流のあった方が注釈者（和田）へ本書簡を資料として提供して下さった。ただし、同資料は資料提供者が筆写したものである。現在、書簡の原本は所在が明らかではなく、翻刻に際してはこの筆写資料を用い、内容を通読した上で本人しか書き得ないものであると判断し、本稿を發表することにした。なお、筆写の過程で漢字や仮名遣いなどに若干の異同が生じた可能性はある。

その後、時代の風波の中にもお元気で御活動の様子、陰乍らお伺いしまして心強く存じて居りました。あれから十四、五年以上も経ったでしょうかはじめてお目にかかったのは、間宮さんのお隣にあった、渡辺順三のお宅^{注1}で、真夏の頃であったと記憶しております。

私たちのなつかしいソビエトのマキシム・ゴーリキーの死^{注2}が、つたえられ

文学評論がゴーリキー追悼号を出した^{注3}頃のことであつたと記憶して居ります。

恰度文学評論の発行人大竹博吉氏が逮捕された^{注4}後のことで

落ち着かない気持ちでほんの数分お話ししたと言うより、御挨拶申し上げたと言う方が適当な様な——お会いのしかたでした。

「太陽のない街」以来、どんなにお目にかかりたいと思ひ、文学評論に載せて頂いた私の「地下道の春」についてご親切な批判を頂いたこと^{注5}についても申し上げたいこともあり

さらにプロレタリア文学につながるものの一々として、あの運命的な分岐点に於いて御指導を受けたかったです——

あのときそんな暇はなく、あなたは慌ただしく自転車に乗ってどこかへ行ってしまわれました^{注6}。

私とてもじつとしていられない気持ちで家に帰り、そのまま北海道へ旅立ってしまいました。

青森から函館に渡る船の中で偶然見た新聞に日支事変ポツ^{注7}の記事を見まして

何故かこのまま東京へ帰れなくなると言う気がしましたが

その予感が当たって私は北海道に生活の根を下ろしてしまいました。

一日毎に言論の自由（その他の自由ですが）が縮められ、それが皆無と

なつた時に大東亜戦争が起りました。

十二月九日の朝 深い雪の中を 私の夫が予防拘禁法によって検挙されて^まから

私も個人的などんなつながりにも用心しなければならぬと（それ以前からですが）思いみんなと消息を絶ってしまいましたし 絶たれてもしまいましたー がみなさんたちはどうしておられるだろうと いつも心配して居りました。

何百の人たちが検挙されたとは聞きましたが それが誰方であるか 知ることも出来ませんでした。

さて戦争が終わって治安維持法もなくなり 天下晴れてどなたをおたずねしても被害を与え合う様なこともない状態になりましたが、現実の錯綜する渦巻きの中で、私の気持ち が がんじがらめに なりおたよりを書くことができませんでした。

ともうしますのは 私の現在生活している場所は鉄工所ですが この工場は十四人ほどの従業員が二百人以上にもなり機械の数も殖え 工場の敷地も建物も大きくなっていました。

この社長は進歩的と言う思想のポーズをとって ボスに対して 反抗的な態度をみせたりして 一寸英雄的な様に思われている 町の人気者でした。

そのポーズから工場の労働運動に対しても寛大を装わざるを得ない悲喜劇の持ち主ですが ですから私の工場を中心に色んな問題が 発生して 私たちの生活の底の底までそのためにかきまわされて いました。

いまその私の最近の工場も二十人程に従業員が減り 中小企業の 一つの典型的な姿となって居ります。

こうした推移を越えて従来の経営のやり方では生きられるか生き

られないかと言う中小企業のきびしい運命が 私の心に少しの余裕も残さなかつたのですー が戦後八年苦しさも底をつき喰うか喰われるかのぎりぎりの線に押し込められた現在 妙に心が落ち着いて おたよりする気持ちがでてきたのです。

中小企業は訴える以外に生きる途がないと言う底に立つてこの頃 筆をとりはじめました。

勿論文学的修行というものは持病の様なもので地方新聞にはずつと書きつづけていました^まが、私の文学がそれがはじめから決ま っていると言われればそれまでですが 戦後あらためて自分の人生 社会の立脚点とかを考え直して文学と生活の距離が一致する方向へ はつきりした道を再確認したのです。

それで急に元気になっておたよりする気持ちが出てきたのです。そして現実的に中小企業の生きていける道を（現実のこの情勢の中で）（MSAF^{注1}の経済情勢の下で）求める生活的立場にたつて 作家的道を求めたいと思つて居ります。

中小企業はつぶされる運命にあるとするならば、つぶされない様に生きていくことも又私たちの抵抗だと思えます。

私たちは現に生きていける生きたいのです。

どんな経済的理論 社会的理論によつて中小企業はつぶれるものと結論されても 私たちの中小企業に働くものは つぶされたくないし困難なというより絶望的な情勢の中にも中小企業の建設的な希望的なみちを求めていきたいのです。

そうした心理状態の中で「地下道の春」についてのご批判 落ち着いてもう一遍書くと良いと御言つた言葉^{注1}を思い出して います にご指摘下さいました様にあの時分の一切の問題に対する焦燥的な

態度年齢故もありましたでしょうが、私自身の人生に対する腹のすわらなさにも大きな原因があったことをいまになって気が付いて居ります。

と申して只今腹がすわったかと自分に反問してみても「そうだ」と答えることはできませんが――
 気が付いたと言うことに多少の進歩を感じられる様な気がしません。

「地下道の春」は あなたの「太陽のない街」の感激から生まれた一微粒子の様な気がします。私のあの時分の追い詰められた少しの余裕のない気持ちでは、あのテーマを活かすことが出来なかつたと今にして気が付いています。ただあの時の無謀な意欲だけはかえり見て楽しいものだと思うのですけれど――

次に私は四、五年間はなれていた（客観的立場に立っていた）労組のことに勢力を集中して居ります。

戦前の労働組合運動と戦後の労組運動の種々な差異をあらゆる角度から研究しております。

現在の労働運動の客観的情勢や 組織力や主張や方向や種々雑多の労働協約の問題――わけてそうしたるつぼの中に生まれてくる人間関係の面白さは つきるところがありません。

私の作家的な土壌もまさに中小企業とこの中にある様な気が致します。

十四のときから今の数え方でいけば十二才の時から文選女工としてきたえられて来たか、弱らせてきたかわかりませんが、私の心の故郷は労働組合運動にある様で 労組運動に引かれるのは私の宿命とでも申しましょか

あなたが私と同じ熊本の人であり 植字工であったことを思い出すと何故か肉親的な血のあたたかさを感じまして、それがあなたの作品に対して私が引かれる理由であります。勿論職業的な地域的な狭さであなたの作品を限定するものではありませんけれど――

終わりにあれからの長い年月がたつて 誰方の消息も存じませんが 渡辺順三御夫妻様は御健在でしょうか すばらしい詩を書いていらつしやつた金龍済さん^{注12}は朝鮮戦争が起こつて どうしてらつしやるでしょうか

島木健作さんの死^{注13}は風の噂に伺いましたが真偽はわたしにはわからないのです。

松田解子さんが花岡事件をお書きになったこと^{注14}は 社会タイムス^{注15}で知りました。

又一番お世話になった村山知義さんが漁村の問題と取り組んでいられること^{注16}も社会タイムスで知りました。

みなさんの御消息を伺いたいと思います。

おついでのごときに、お会いになりましたらよろしくお伝えをお願いします。

さて昨日はこちらに前進座がきて 「屈原」を上演しました^{注17}。大入り満員の盛況でした。尚最近こちらの中央バスが 三十年振りで全線ストを十日間強行して勝利した事件あり^{注18}、これで北海道の一小都市である小樽も色々波立って居ります。

東京は問題の中心点で、生起するさまざまの渦巻きの中でみなさんまだおおいそがしいことと存じます。

これで第一信を 私の第二の出版の決意を申し上げたことにして終わらせて頂きます。

どうぞみなさんへよろしくお伝え下さいませ

おわりに

資料提供者によると、浅井の夫の蔵前光家が生前に、この書簡が実際に徳永へ出されたかどうかは定かでないと話したそうだ。日本近代文学館の徳永直文庫には、浅井の徳永宛書簡は一九五五年の年賀状一通しかない。また、資料提供者は、浅井が作品の草稿としてこの書簡を書いた可能性があることも示唆された。いずれにせよ、戦時中から戦後にかけての激動の時期を捉えた貴重な記録として、この書簡は価値を有するだろう。

【注】

- 1 「間宮さん」は間宮茂輔のこと。豪徳寺裏（世田谷二丁目二二八〇番地）にあった渡辺の家は、徳永が住んでいた経堂（世田谷三丁目二四一五番地）に近く、お互い頻繁に出入りしていた。
- 2 一九三六年六月一日に死去。
- 3 一九三六年八月号のこと。『文学評論』はこの号をもって終刊した。
- 4 『文学評論』の発行元であったナウカ社社主の大竹博吉は、一九三六年七月三十一日に御殿場署に拘束され、翌八月一日に軍機漏洩の嫌疑で検挙された。これに伴い、徳永と渡辺も『文学評論』の関係者としてコップ（日本プロレタリア文化連盟）再建運動の疑いをかけられ、翌年二月に取り調べを受けた。
- 5 「地下道の春」は『文学評論』一九三六年五月号と同年六月号に連載された。徳永は『文学評論』同年七月号に発表した「文芸時評」で同作品を取り上げ、構成力が不足しているために題材を十分に消化できていない点を批判した。ちなみに、「地下道の春」の構成力の問題については、青野季吉も「文芸時評(6)」
- 6 『報知新聞』一九三六年五月三日)において「抽象的な空虚さで所々穴がいてゐる」と指摘している。
- 7 一九三七年七月七日に起きた盧溝橋事件を指す。
- 8 浅井の夫は社会運動家の蔵前光家で、一九四一年二月九日から四四年の末まで予防拘禁された。
- 9 終戦後、浅井は『小樽新聞』や『みなと新聞』をはじめとする北海道の地方新聞へ随筆を中心に発表していた。
- 10 正しくはM S A (Mutual Security Act、相互安全保障法)の略で、米国が一九五一年に制定し翌年に改正した法律。友好諸国に援助を与えると同時に米国の安全を維持することを目的としたもので、鈴木武雄編『経済小辞典』(増訂版、ダイヤモンド社、一九五三年九月)では、「現実の援助をみると、圧倒的に防衛援助が多」く、「つまり、米国は援助をする代わりに、民主主義国中、米国の安全と関係ある国に対して軍備を拡張せよという目的をもつものであり、」
「1954年度の米国援助の予算中には日本に対する援助も予定されている」と記されている。
- 11 注5の「文芸時評」で、徳永は「僕らはもつと落ちつかう。落ちついて身についたものから小さくても充分にみがいて表現しやうではないか。(中略)この題材を作者は他日改めて描くかと思ふ」と述べている。
- 12 金龍濟(キム・ヨンジエ)は、『文学評論』一九三六年七月号に「地下道の春」について」と題する浅井の作品評を書いている。
- 13 一九四五年八月一七日に死去。
- 14 花岡事件は一九四五年六月三〇日に、秋田県の花岡鉱山で中国人労務者が蜂起した事件で、戦後、強制連行による過酷な労働を強いられたいことが問題

となった。松田はこの事件の真相を究明するため、一九五〇年より現地調査を行い、小説「地底の人々」を執筆し、『人民文学』一九五一年一〇月号から同年一二月号にかけて第一部を、五二年四月号から同年七月号にかけて第二部を連載し、五三年三月に世界文化社より単行本を刊行した。

15 一九五二年三月一日に創刊された日刊新聞。

16 「死んだ海」を指すと考えらえる。「死んだ海」は千葉眞鏡子にある現実の漁港をモデルに、漁業にまつわる労使問題を描いた全三部作の戯曲である。本書簡が書かれた時点では、第一部「死んだ海」、『世界』一九五二年七月号)と第二部「真夜中の海」(同誌同年一二月号)までが発表されていた。

17 「屈原」は、中国戦国時代の楚の詩人である屈原を主人公とした郭沫若原作の戯曲である。『月間前進座』再刊四五号(一九五三年七月発行)によると、前進座の河原崎長十郎一行(第一班)は、同年七月二三日に小樽の中央劇場で公演を行っており、このことから、欄筆の日付のない本書簡が一九五二年七月四日に書かれたと推定できる。なお、坂本徳松『前進座』(黄上社、一九五三年五月)によると、前進座の座員とその家族あわせて七十五名は一九四九年三月七日に日本共産党へ入党し、その後も順調に演劇活動を行っていたが、五二年五月より始まった中村甌右衛門・河原崎国太郎ら第二班の北海道公演は、会場が急遽使用禁止になるなどの弾圧を受け、アルバイトの青年が逮捕される事態にまで発展、ついには甌右衛門へも逮捕状が出された。そのため、本書簡が書かれた前年の六月一日に小樽市会議事堂で行われた公演は、甌右衛門を逮捕しようとする警官が眼を光らせる不穏な雰囲気の中で行われ、公演後のデモでは観客と武装警官が衝突して二十七名の逮捕者と多数の重軽傷者を出していた。

18 『北海道中央バス五十年史』(北海道中央バス、一九九六年六月)によると、一九五三年六月、北海道中央バスの労働組合が賃上げを要求するも会社側と合意に至らず、組合はストライキを決行し、争議は十一日間にわたった。

「大切な人を失った」

中村青史

宮崎静夫さんが亡くなった。四月十二日のことである。今年の孟宗忌に全くめずらしく、顔を見せられなかった。風邪かなあぐらいに思っていた。普段病気とは縁遠い方であったのだ。去年の暮れに病果が発見されたのだそうで、私もそのころ心臓と坐骨神経痛で痛めつけられていたので、宮崎さんのことは気にもしなかったのだ。今となっては心残りがして仕方がない。

徳永直文学碑の設計をされて以来の付き合いだった。そして熊本徳永直の会設立以来の同志であった。文学碑設立時の生き残りは、宮崎さんと私ぐらいであった。高光義明(文学碑発案者)、久保田(渡辺)義夫(碑文選定者)、永田日出男(碑建立石工・「舩船」主宰)、杉野健一(林 敦)、吉良敏雄、井上栄次、首藤基澄(直研究会代表)、中田幸作、津田孝(評論家・直の娘婿)、岩本税、木庭克敏、森上幸義、大野タツメ(直の実妹)、寺崎フサエ(碑土地提供者)、緒方求也(当時ニユースカイホテル社長)、阿部次郎(当時熊本信用金庫理事長)、ほかに二、三人名前も忘れた、これらの方々もみんな彼岸の人となっていた。それに宮崎静夫さんも加わられたのである。

去年の今ごろだったか、文学碑背後の泰山木について、「あんなに大きくなるとは考え及ばなかった、失敗だったなあ」と嘆息された。「大輪の白い花の時は見事ですすばい」と、なぐさめみたいなことと言ったことを思い出す。文学碑前面には、ツワが配されていた。



解説 (中村青史先生)



60歳の頃の宮崎静夫さん



偲ぶ会の風景



献花 (寺澤孝子さん)

ところがそれを抜き取って持って行く不屈き者が居た。それが再三にわたった。その都度宮崎さんは自宅の庭から持ってきて植えられていた。彼にとつては徳永直の文学碑は、大事な作品であつたらうし、また子どものようなものでもあつたようである。

画家としての宮崎静夫はみんなの知るところであるが、彼はまたすばらしい文筆家でもあつた。彼の自伝やエッセイは、素直で風格があつた。

(前会長・元熊本大学教授)

二〇一五年度 総会 報告

- 一、期 日…二〇一五年 五月二四日(日) 午後三時より
- 二、場 所…崇城大学市民ホール小会議室
- 三、追悼式…「宮崎静夫さんを偲ぶ会」

元熊本大学教授・前会長・文学博士

中 村 青 史 氏 「宮崎静夫さんをしのぶ」

四、総 会

- 1 会長挨拶
 - 2 二〇一四年度 事業報告
 - 3 二〇一四年度 会計及び監査報告
 - 4 二〇一五年度 役員
 - 5 二〇一五年度 事業計画案
- *「徳永直読書感想文」の募集を停止し、
新たに「徳永直の作品紹介文」の募集を実施する。
- 6 二〇一五年度 予算案
 - 7 二〇一五年度 その他

*第三九回「孟宗忌」は、

二〇一六年二月十四日(日)に予定する。

五、閉会

六、懇親会

(3) 2014年度会計報告

収 入①		支 出②	
繰越金	60,913	事務費	1,830
会費(46人)	92,000	通信費	22,854
利子	23	総会関連費	1,600
寄付	29,500	碑前祭関係費	18,990
		会報印刷費	30,240
		熊本文化振興会団体会費	20,000
収入合計	182,436	支出合計	95,514
		残 金	86,922

①-②=86,922円(次年度への繰越金)

上記の通り報告いたします。

2015年5月17日

会計 荒木 恵

2014年度監査報告

監査の結果、上記の通り相違ありません。

2015年5月24日

監査 田中 耕二

(6) 2015年度予算

収 入		支 出	
繰越金	86,922	事務費	5,000
会費(40人)	80,000	通信費	25,000
雑収入	78	総会関係費	5,000
		碑前祭関連費	20,000
		会報関連費	35,000
		くまもと文化振興会会費	20,000
		作品紹介文関係費	10,000
		予備費	47,000
収入合計	167,000	支出合計	167,000

* 会費は、同封の払込取扱票にて払い込みください。

また、郵便局備え付けの払込取扱票にても払込可能です。

* 会費の「ゆうちょ銀行」への振替先

口座記号番号：01710-9-121371 加入者名：「徳永直の会」



第38回「孟宗忌」より

お詫び

紙面の都合上、今回は「徳永直文学散歩」をお休みします。
また、メール便が利用できなくなりました関係で、送料の節約のために会報を折り曲げて郵送させていただきました。

「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。また、徳永直に関する書物・研究・記事等の紹介も行っていきます。「徳永直の会」で検索してください。アクセス数が、累計二八〇〇回を超えました。また、HPの使用料等に関しましては、会員の和田崇様のご厚意でご負担していただいています。

新規会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、人会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

住所変更等の連絡のお願い

住所変更等がありましたら、左記までご連絡ください。

〒 862-0955 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

(10)

第1回「徳永直の作品紹介文」募集について

徳永直没後 50 年にあたる 2008 年に「徳永直文学選集」、翌 09 年に「徳永直文学選集Ⅱ」を刊行しました。これを機に多くの方々に、徳永直の作品に触れていただきたいと考えております。

「徳永直の会」では、徳永直の作品を読んだ感想文を募集してきましたが、この度「徳永直の作品紹介文」の募集に替えることとなりました。次の要項で募集いたしますので、多くの方々の応募をお願いします。

- 1 趣 旨 徳永直の功績をたたえ、彼の作品を対象とする紹介文を募集することで、直の作品の読書をすすめ、豊かな心を育てるとともに、労働に対する理解を深めることを目的とします。
- 2 主 催 「徳永直の会」
- 3 対象図書 徳永直の作品
- 4 応募内容 作品の紹介文（未発表のものに限る。400 字詰め原稿用紙での枚数：本文のみ）
 - ①小学生の部 2 枚以内（201 字～800 字）
 - ②中学生の部 3 枚以内（601 字～1200 字）
 - ③高校生の部 4 枚以内（1001 字～1600 字）
 - ④一般の部 5 枚以内（1401 字～2000 字）
- 5 応募方法 応募作品に応募用紙を添付し、郵送か E メール（添付ファイルは Word か一太郎）にて応募してください。
- 6 応募期間 2015 年 8 月 1 日～2015 年 11 月 30 日（郵送の場合、当日消印可）
- 7 賞
 - ①最優秀賞（各部門 1 名以内）
賞状、賞品（図書カード 3000 円分）
 - ②優 秀 賞（各部門 3 名以内）
賞状、賞品（図書カード 1000 円分）
 - ③佳 作（各部門 10 名以内）
賞状
 - ④学 校 賞（1 校以内）多くの作品をご応募いただいた学校の中から選ばせていただきます。
賞状、賞品（図書カード 5000 円分）
- 8 選 考 選考委員会において、作品を良く読みこなし表現力等に優れた作品を選びます。
- 9 結果発表 2016 年 1 月に、入賞者に直接お伝えします。また「徳永直の会会報」で発表します。最優秀賞及び優秀賞については、作品集に掲載します。入賞者については、氏名、住所（市区町村名まで）または学校名、年齢または学年等を報道機関にも公表します。
- 10 表彰式 2016 年 2 月 14 日（日）午後（「孟宗忌」当日）
最優秀賞、優秀賞を受賞された方を対象とします。なお表彰式出席に要する諸費用は、本人負担となります。
- 11 応募先・問い合わせ先 〒 860-0051 熊本市西区二本木 3 丁目 1-28 熊本出版文化会館内
「徳永直の会」事務局 Eメール open-island@r4.dion.ne.jp
携帯電話 090 - 5944 - 1573（高木）

「徳永直の作品紹介文」応募用紙

（形式をまねて作られても構いません）

題 名			
フリガナ			
氏 名	() 歳		
学校名または職業			学年
学 校 もしくは 自宅の住所	〒	—	電話番号
対 象 作 品			